

冬の贈り物

~pre story of the closed moon~



文：瑞原チヒロ／絵：浅都裕久

【鶴の恩返し～カミル&セレン編～】



それは今となっては昔のお話。

ある村に、一人の若い青年が住んでいた。

早くに親を亡くし兄弟もいない彼は、毎日小さな畑を耕して、採れた作物を隣町まで売りに行く。細々と続ける暮らしに不満を持つこともなく、ただひっそりと過ごす日々。

ある日のこと。いつものように隣町まで出かけた彼はその道中、罨にかかった鶴を見つけた。

それは見事な鶴だった。罨から逃れようともがくその羽ばたきさえも目を奪う。空に散る羽根の何と軽やかで優雅なことか。

――可愛そうに。

青年は鶴を逃がしてやることにした。足の怪我には布を縛りつけ、最低限の止血もした。

すっかり憔悴した様子で治療を受ける鶴に、優しく語りかけながら。

「罨には気をつけなさい。猟師も生活がかかっているから本気になります。次は助けてあげられるか分からない」

幸いそれほど深い傷ではなかったらしい、ほどなくして鶴は自力で立ち上がった。数度翼をはためかせ、一声高らかに鳴く。

青年は微笑んだ。

本当に美しい鶴だ。滑らかな曲線を描く背も、ツンと突き出したくちばしさえも。

だがそんな姿かたちより何より、

飛び立つ前に、青年に向かって長い首をかしげてみせた――何か言いたげで、でも表現できずに困っているかのようなその仕種が、鮮明に記憶に焼きついたので。

それから数日後のこと。

その日は雪が降っていた。日中から降り出した白は夜には吹雪へと変わり、風と共に青年の小さな家を激しく揺らす。

そろそろ眠る時間か、と青年が囲炉裏の火を消そうとした、その時。

戸が――強く叩かれた。

「……………」

風の音ではない。まして雪の音でもない。

訝しく思った青年は、息を殺して耳を澄ます。

再び、戸を叩く音。ドンドン、ドンドン、ドンドンドンドンドンドン――

「――うるさい！」

思わず戸を思い切り開け、彼は怒鳴った。「何度叩けば気が済むんです――！」

目の前にいた誰かは――

突然の家主の怒鳴り声にも何故か、ひるむことなく。

「だってすぐに出てきてくれないんだもの。吹雪なのに。私寒いのに。そりゃあ叩くわよ叩くでしょ叩かなきゃおかしいでしょ！」

むしろ猛然と言い返してきたその人物に、青年は絶句した。

美しい女だ。

たおやかな体を、見るからに上等そうな着物に包んでいる。さらりと背中に流れる長い黒髪は

濡れたように艶やかだ。吹雪の中を歩くための笠は被っていても、それ以外何一つ荷物を持っていない。

何より笠の下からのぞいたその瞳は、不思議なほど強く明るい輝き。夜空に一等輝く明星のように。

「客が来たらすぐに対応するのが礼儀ってものでしょ、村では人と人との繋がりが大事で――ああ」

寒い、と急に思い出したように震えあがり、娘は自分の身を抱きしめて肩をすぼめた。

「――ええと。中に、入れてほしいな――、とか……ダメ？」

強気な態度から一転、控えめに上目づかいをする。

その眉尻が何とも頼りなさ気に下がっているのが、あまりにも哀れで。

「……上がりなさい」

青年はため息と共に、娘を中へと促した。

その日から、あれこれ理由をこじつけては、娘は青年の家に居座り続けた。

名は名乗ったものの、どこから来てどこへ行くつもりだったのかを尋ねると、途端にあたふたし始める。青年が厳しく問いつめようとする、拗ねて膨れて部屋の隅で縮こまる。もう嫁に行っているもおかしくない年齢に見えるが、その態度は子供としか言いようがない。

そう――子供のような女だった。

雪を見てはしゃぎ、晴れた空を見て眩しそうな顔を、雑草の生えた地面を見て嬉しそうに目を輝かせる。

そんな娘に調子を狂わされ続け、そもそも女一人を強引に路頭に叩き出すわけにもいかず、青年は娘を家に置き続けた。

「家にいるからには家のことを手伝いなさい。ごくつぶしならこちらも容赦せず追い出しますよ」

そう言うと、娘は渋々と家事を始めたのだが――

数日としない内に、青年は娘に家事をやめさせた。

(……どんだけ家事ができないんですか……)

料理をやらせれば家畜の餌並なものを生み出し、掃除をやらせればますます部屋が荒れる。唯一できるのは洗濯だった(服にこだわりがあるかららしい)――が、二人分の洗濯だけで一日潰れるはずもない。

かと言って畑仕事をやらせる気にはなれない。この地方では、人数の少ない女性に腰に負担のかかる仕事はさせないのが一般的で、青年もそう教わってきたのだ。

「むしろ畑仕事の方が楽しそうなのに」

娘はそう言ってしきりに残念がった。

意外と体力はあるようだから、ひよっとしたら向いているかもしれない――いやいや、畑をぐちゃぐちゃにされてはたまらない。

ごくつぶしスレスレとなりかけている娘を改めて見て、青年は深くため息をつく。

「全く。……別に手先が不器用なわけではなさそうですが」

娘の白く細い手は、針仕事が似合いそうにも見える。

だが、やらせようとは思えなかった。……血まみれになられても困る。

これから一体どうしたものかと青年が考えあぐねていたある時、娘は唐突に言い出した。

「こうなったら奥の手よ。私に機織りをさせて！」

「機織り……？」

一体どこからそんな発想が出てきた。実はねー、と娘は実に楽しそうに話し始めた。

「三軒隣のお友達が、古い機織り機もう捨てるって言うから、もらって約束しちゃった」

「は？」

「奥の部屋に置けばいいわよね？」

「いや、ちょっと」

娘の最大の特技。それは村の人々と仲よくなるのが異常なほど早いということだ。青年の知らぬ内に何をどうやったのか、村中で彼女を知らない者はいない、どこか『また遊びにおいで』などとすれ違うたび声をかけられるのだ。

困ったことに、娘はすっかり青年の『妻』と見なされていた。

『これ、奥様に～』などと村人に言われるたび、何やら豆腐の角に頭をぶつきたい気分になるのだが。

機織り機は本当に青年の狭い家の一部を陣取った。

使い古されたそれを眺めて、娘は嬉しそうに笑った。

「うーん、愛を持って使われてきた道具っぽくていいわよね。じゃあ今日から早速お仕事始めるわね」

くるりと青年を振り返り、「でも！」と突然人差し指を突き出して。

「約束して。私が機織りしてる時は、ぜーったいに部屋を覗いちゃダメ。いい？」

「はあ？ 何でそんな」

「だってあなた、絶対横からあーしろこーしろ口出してくるでしょー？ 集中できないんだもの」

「……………」

「はい、約束。指切りげんまん！」

強引に青年の小指に小指をからめて「——指切った！」弾むように指を放すと、娘は笑った。

「見ててよね。私だって、あなたの役に立ってみせるんだから」

「——」

その時の娘の顔が——

……造形の美しさ、よりも。浮かべる表情が、新たなことに挑む子供のように無邪気で誇らしげで。

青年の全ての言葉を奪ってしまった。

この何もない村に生きてきて、これほど鮮やかに笑う女性を、彼は見たことがなかったから。

青年が畑仕事をしている昼間、家からはぎっこんばったんと機織りの音が聞こえる。

何かやらかしはしないかとはらはらしながら、青年は何度も様子を覗きたい衝動にかられた。それでも、約束は約束だと自分に言い聞かせた。

しかし、問題はやはり深刻だった。

半月経ち、ある日奥の部屋から出てきた娘はいやに意気消沈していた。

青年は心配になって「どうしました？」と声をかけた。

「……できた」

おずおずと差し出されたのは一一布。

娘が反物を織り上げた時は、必ず褒めようと一一子を持つ親のような決心をしていた青年は、しかし言葉を詰まらせた。

一一ボロい。

形があまりにも歪んでいる。模様も一一前衛的独創的、と思ってもらえたら御の字的に、何が何やら分からない。しかもあちこちから糸が飛びだしているのだ。

これでは雑巾にもならない一一言いかけた言葉を飲みこんで、青年は珍妙な顔で黙りこむ。

「……は、初めてだったから」

一人で織るのは初めて一一そう繰り返し、娘はむうっと悔しさをこらえる顔で青年を見上げた。

「練習すれば上手になるわ。練習すれば！ ほら、最後の方は最初の方よりよくなってるでしょ？」

「……はあ、まあ……」

正直似たり寄ったりだったが、彼女のやる気をくじくのは気が引けた。他にやらせることもないし、頑張りたいというのならそれで……

しかし、「やっぱり止めさせておくべきだったかもしれない」と青年は再び後悔することとなる。

半月、また半月と過ぎて行き、反物一一とはとても呼べないシロモノ一一を織り上げるたび、娘が目に見えて痩せ細っていくのだ。

たしかに、その完成度はほんの少しずつだが上がっていた。このまま織り続けたなら、いずれは良い物が出来上がるかもしれない。だが、だが一一

「あなたが体を壊してどうするんです……！ 私はそうまでして働かせたいわけじゃない！」

今日もまた奥の部屋にこもろうとする娘の、細くやつれた背中に、青年は悲痛な声を投げる。娘はぴたりと立ち止まった。

「一一だって、働きたいんだもの」

娘は囁くようにそう言った。

振り向かないまま。けれどその声はとても優しく。

「それぞれに働いて、助け合って支え合って。一緒に暮らすって、そういうことじゃない？」

「――」

「私は大丈夫よ」

肩越しに振り向き、娘は軽く片目をつぶった。

そのまま奥の部屋に入っていく娘を、止めることはできなかった。

ぎっこん、ぱったん。今日も機織りの音がする。

畑にも聞こえるその音が、最近では日常になっている。その音がすると安心する自分に、青年は気づいている。

規則正しい音を立てるその場所を見つめて、青年は娘の言葉を反芻する。

『助け合って支え合って』

(……だからこそ)

――弱っていくあなたを無視できない。そんな当たり前のこと――
次に部屋から出てきた時、あなたは一人で立っていられるのか？

青年は家に飛びこんだ。

迷わず奥の部屋の戸を開け、娘の名を呼ぶ。もういい、と――

――バサリ、と何かがはためく音がした。

青年の目の前、で、

一羽の美しい鶴が

一声

――何より目に焼きついたのは、長い首をかしげるその仕種

「どうして」

戸を開けてしまったの――

いつの間にか鶴は消え、目の前には悲しそうな顔でたたずむ娘が一人。

「……約束、したのに」

その娘は心を隠さない。嬉しい時も、悲しい時も、必ずその顔にはっきりと表れる。

――彼女はとてとても

「姿を見られたら、もうこの家にはいられない。さよならだわ」

ぽつりとつぶやく。

全てが終わってしまった、そんな諦めの響きがにじむ。

しかし青年は、そんな娘を見つめたまま問う。

「――どうしてこの家に来たんです」

「あなたは私を助けてくれた。恩返しなんて大層なことは言わないわ。あなたの傍は居心地がよさそうだったから」

再び青年を見た娘は、懐かしそうに目を細めた。

一緒にいたかったの、と。

青年は思い返す。娘と過ごした時間を。

娘と交わした言葉のひとつひとつを。

そして、娘が見せた表情の全てを。

――目の前の人人間ではないということに、自分はいつ気づいていたのだろうか？

考えるまでもない。最初から――だ。

青年は吐息のように笑った。

「あんな吹雪の中を、あんな風に訪ねてくる旅人はいませんよ」

「え？」

「最初から分かっていた。あなたの正体なんて……それなのに、今更それがはっきりしたからと言って、何が問題なんです？」

呆れるほど淡々と紡がれる言葉に、娘はきょとんとする。

青年は彼女の視線をまっすぐ見た。

「出ていく必要はない。このままうちにいればいい」

娘の澄んだ瞳がみるみる見開かれ――

「――で、も。私は、鶴だから」

「鶴だからこのまま放ってはおけないんです。また私の知らないところで簡単に罠にかかるでしょうし」

ため息をついたふりをして、青年は腰に軽く手を当てた。「言ったでしょう、今度は助けてやれるか分からないと。だったら、最初から私の目の届くところにいなさい」

「――」

「それに」

まだ、機織りの練習中でしょう？

そんな茶化すような言葉が、娘の諦めの滲んだ心に光を与える。

輝きだした娘の顔。しおれた花が再び咲いたかのような。いや、はばたく力がまだ翼に残っていることを、思い出した鳥、の――

何もかもが鮮明に記憶に焼きついていく。

きっとこれからも自分は、襲いくる面倒な毎日もこんな娘の表情ひとつで許してしまうのだろう。そんな自分に、小さな苦笑をこぼしながら。

「……で。絶食しているわけでもないのに、どうして機織りくらいで痩せるんです？ そんなに精神的に負担ですか」

「違うわよ。使ってる糸が自前なの」

「……まさか羽根ですか。羽毛は人間化すると体そのもの……？ まあたしかに、」

「普通は髪の毛なんだけど。でもハゲたくないし、色々細工してごまかして変身して」

「それ以上言わなくていいです」

「だから知らない方がよかったですでしょう？ 私の正体なんか」

その後二人は仲よく幸せに暮らしましたとさ。……多分。

《鶴の恩返し／おしまい》

【ハロウィンの夜】

「トリックオアトリート！」

突然そんな声を上げながら、セレンが部屋に飛び込んできた。

彼女の姿を見たカミルは、一瞬呆気にとられて目をしばたいた。

「何なんです、その格好は？」

「魔女！」

じゃーん、とか言いながら女は羽織った黒マントを持ち上げてみせる。頭にはやけにとんがった大ぶりの帽子。おまけに片腕に、なぜだか箒まで抱えている。

魔女。カミルはその単語を口の中で繰り返した。いぶかしく思って問う。

「……大昔に朱雀の術者の女性をそう呼んだと聞きますが……」

「その魔女じゃないわよ。でも似たようなものかしら？」

セレンはそう言って、にやあと笑った。

何かをたくらんでいる目だ。

カミルは全身で警戒した。そもそも、言っている意味が分からない。

時刻はもうすぐ夜更け。所は旅人である彼と彼女、そして彼らの主である少年の三人がここ数日世話になっている宿の一室だ。狭いながらも綺麗なこの部屋に泊まっている――セレンは一人隣室だが――この数日間、とりたてて問題は起きていなかった。カミルとしてはそろそろ何かが起こるはずだと思っていたのだが。

やっぱり、何かが起こりそう。

正しくは、セレンが何かを起こしそう。

自然と目つきが鋭くなっていく。それを見て、「やーね」とセレンはマントをひらひらさせながら楽しげにその場で踊った。

「別に何も無いわよー。ただ“ハロウィン”をやってみたかっただけ」

「はる……なんですって？」

「ハロウィンだ」

答える声はカミルの背後から聞こえてきた。

肩越しに振り向くと、窓際の椅子に座って静かに読書をしていた少年が、いつの間にかこちらを見ていた。

「この東では有名な、物語の中の行事のことだと思うぞ。収穫祭と悪霊祓いと聖人祭を兼ねて行う」

「さっすがシグリィ様」

少年の言葉が正しいらしい、セレンは嬉しそうに笑う。

はあ、とカミルは気の抜けた声を出した。彼はその行事をまったく知らなかった。

「物語の中の行事、ですか？」

「そういうことになってる。実際、東で本当に行われていたという記録がないからな。ただ――物語の中での描写がとてもリアルだったから評判になった。場所によっては物語そのままに行事を再現するところもあるらしいが」

「そーですよー。この町もそうみたいです」

商店街でお店が出てましたー、とセレンは言った。

日中はほどこかをほっつき歩いているこの女が、町の間人と交流を深めているのは知っていたが。

具体的にどんな行事なんです、とカミルは聞いた。

セレンはその質問を待ってましたとばかりに、満面の笑みで一步こちらに近づいた。

「――お菓子をくれないと悪戯するぞっ！」

がおーと箒を持っていないほうの手でマントを高く広げる。一応威嚇というか、襲いかかろうとする姿勢に見えなくもない。そんな格好で、セレンはケケケと奇妙な笑い声をあげる。この女はなぜか、こういった変な笑いかたをすることがしばしばあった。しかもそれが異様に似合っているのが問題だ。

「……お菓子？」

意味が分からない。悪戯ってなんだ。しかしセレンは満足そうである。

「ハロウィンでは悪魔や使い魔の仮装をして家々を回るんだ。そしてお菓子をもらう」

少年が簡単に解説してくれた。「……本当は、それをやるのは子どもなんだが」

「いーじゃないですかー。大人も一緒に楽しんでこそですよっ」

「大人はお菓子を用意するほうだと思うぞ」

と少年は苦笑したが、目が面白がっている。

「シグリィ様も仮装しませんか。お店でいろいろ売ってましたよー」

セレンはとことこと窓際まで歩いていき、少年の前に立った。

少年は女を改めて見上げ、感心したようにうなった。

「ずいぶん似合っているなセレン。ハロウィンでいう魔女も術を使う人間のことだから、お前には合っているんだな」

「ですよー私もそう思います。あと猫娘とかかわいーなーと思ったんですけど」

「……その猫娘とやらは使い魔としての猫が発展したのか？」

「さあ？ この町のシュミじゃないですかー？」

二人の会話は尽きない。

その邪魔をしたいわけではなかった。特に少年が楽しそうならそれでいい。そう言いたいの
は山々だったが。

カミルは腹の奥底から湧き出すような声で、低くつぶやいた。

「つまり――セレン。その仮装道具……買って、きたわけですか……？ 旅費が少ないから節約
しろと昨夜も言ったはずですが」

ぎくり、と女が硬直した。

たかがマント。たかが帽子。たかが箒。

だが！ ゴミではない以上どう考えてもそれなりの費用をかけているはず……！

「ま、マントも帽子も箒も他で使えるもの！」

苦し紛れの彼女の言葉尻を、逃さず捕えて叩き返した。

「だったら今後一年そのマントと帽子を身に着けて箒で掃除していなさい！」

そこからガミガミ説教コース。見かねた少年に止められるまでそれは続いた。

床に正座で叱られたセレンは、最後に悲痛な声で呟いた。

——ホンモノの悪魔がここにいる！ と。

ハロウィンがこの町の行事となりつつあるのは本当らしい。夜が更けるにつれて、外が騒がしくなっていく。

窓の外にたくさんの灯が燃え、子どもの歓声と大人の談笑が夜の町に響く。

私たちも行きましょう、とセレンは少年の手を取った。

少年は笑って、三人で行こう、と言った。

外は秋の夜だ。本来は肌寒くてもおかしくない。だが、あちこちにある灯火と人々の熱気のおかげで寒さは消えていた。

気持ちのいい夜だ。月と星は地上の賑わいを、のんびり見下ろしている。

セレンが作った町の知り合いが、彼ら三人を快く祭りに参加させてくれた。好意で少年に簡単な仮装——こちら黒マントと口にくわえる作り物の牙、どうやら吸血鬼らしい——をさせ、お菓子をもらう役を回してくれる。そしてとっくに大人なセレンにまで、お菓子をおすそ分けしてくれた。

町の広場につくと、中央で子どもだけのゲームをやっていた。

セレンは少年を急き立ててそのゲームの輪に参加させた。そして自分は足早に、広場の入口で待っていたカミルのところに戻ってくる。

「あのゲームしばらく続くんだって。今のうちだわ」

「何がですか？」

問うと、セレンはずり下がってきていた帽子のつばをくいと上げた。その陰から覗いた猫のような目が、意味ありげににやりと笑った。

「ちょっと手伝って、カミル」

「はあ？」

「いいから！」

むんずとカミルの手を掴み、「れっつごー！」

と公園の外に向かって走り出す。

「ちょっ——セレン！ どこへ行く気ですか！」

「外！」

「外って——セレン！」

町のあちこちを埋める、盛況な人の群れ。その合間を器用にすり抜けていく。本物の猫さながらだ——しかも引っ張っているカミルの体の大きや動きまで計算した道を走っている。カミルにしても、身のこなしには自信はあった。いつの間にかセレンの手が彼の手を放していても、彼は特に困ることなく彼女の後を追っていく。気持ちは腑に落ちないまま。

彼らは町の敷地から飛びだした。

セレンはさらに走った。——熱気に満ちていた町を出ると、外は一気に気温が下がった。顔や襟元を吹き抜けていく風が冷たい。しかしその分、とても澄んだ空気だ。

静かな草地。上には、夜空。

銀色の月は満月に近く、堂々とした風情で星々を従えている。漆黒の中にあっても眩しいほどの輝きだ。セレンはかなりの速度で先に行くが、全速力というわけでもない。おそらく彼女も、辺りの風景を楽しみながら走っているに違いない――彼女のスカートの裾は軽やかにはためいている。

十五分ほども走っただろうか。

セレンは小高い丘の頂点に立って、ようやく足を止めた。

ぐるりと町の方角に振り向く。つまり後ろを走っていたカミルと向き合う形になった。月は、セレンの丁度頭上にあった。

一瞬、女が月を従えたかのように見えた。

表情がはっきり見えるほど明るい。セレンはマントを払い、両腕を広げる。

「ここなら大丈夫ね！」

「……何をする気ですか？」

怪訝な顔をして尋ねる。

「もちろん――」

セレンは箒の先で空気を薙いだ。そして両手で掴み直し、片目をつぶる。

「――本物の魔女になるのよ！」

気がつくと、カミルとセレンの姿が見当たらなくなっていた。

「どこへ行ったんだ……？」

シグリィは広場の中央から辺りを見渡した。

子どもたちによるゲームが一段落し、一同は次の催し物のために動きだしている。このまま広場の真ん中にいたのでは邪魔になるだけだ。子どもの波に押されるようにして、シグリィも広場の外周へと退散する。

そこにも、二人の姿はなかった。

訝しくは思ったが、危ない気配はなかった。セレンはハロウィンを目一杯楽しみたいに違いがないから、きっとカミルを引っぱってあちこち遊びに行っているのだろう。シグリィを置き去りにしている以上、それほど待つことなくここに戻ってくるはずだ。

だったらここで動かずにおこう。シグリィはのんびりと、広場に出ている屋台を回り始めた。

ハロウィン物語に登場する食材はカブである。だがこの町の特産はカボチャのため、カブではなくカボチャがあちこちで使われていた。カボチャ料理はもちろん、カボチャをくりぬいたランタンや被り物、置物など。

その中にひとつ、おかしな人形があった。粘土で作った人形だ。頭はカボチャ、体は人一一装飾の多い服にマント、羽根つき帽子にレイピア。これは何だろうとシグリィが店の人間に聞くと、「これはこの町で生まれたパンプキン伯爵だよ」と教えてくれた。ハロウィン伝説が遊ぶように人々の口で語られるうちに、新しく生まれたキャラクターであるらしい。

体はすらりとしているのに、顔だけが滑稽な伯爵。これはセレンが好きそうだ。むしろ彼女が昼間この人形を買ってこなかったことが奇跡とも言える。シグリィはおかしく思いながら、その店の人間と談笑した。

それから小一時間経っただろうか。

活気に満ちている地上からふと視線を上げると、空には煌々とした丸い月が見えた。月明かりの眩しさに、一瞬目がくらみそうになる。

一一カミルとセレンが戻ってこない。

意外と遅いな。特別焦るでもなく、シグリィは辺りを一瞥した。と。

月から目をそらしたその視界の端に一一何かが、見えた。

広場がざわめいた。

「あれは何だ！」

誰かが叫ぶ。場が一齐に、月の方角を見る。どよめきが、広場を一一否、町全体を支配する。

シグリィは目を見開いてそれを見た。

泰然と浮かんでいた丸い月。それを隠すように一一

どこからか現れた光の波が、大空を流れていく。

一一極光？ いや、違う。

「虹……？」

それも違う。あえて名づけるなら虹色の極光――

空にかかったカーテンのように。流線型に波打ちながら、人々の視界を横切っていく。

時おり、波間に月の銀色が垣間見えた。しかしすぐに覆われるそのさまは、まるで貴人の姿を隠すビロードのようだ。これは。

人々はひと時、その幻想風景に浸った。シグリィもまた。

やがて、空に変化が現れる――すうと溶けるように消えていく虹色の波。

人々はひととき、その幻のような光景に見とれた。

やがて光のカーテンが流れゆき、月の丸い輪郭がのぞいた。月が戻ってくる――そう思った、そのとき。

町人たちは再びざわめいた。

巨大な黒い影が、月に映りこんでいた。動いている。ひらひらと、布が揺れるような動き。しかしそれは、先ほどのような極光のカーテンとは違う。

マントだ。

シグリィがそう気づいた刹那、黒かった影は花開くように色づいた。

裏地の赤いマントと、一昔前まで貴族が着ていたような足の線をぴっちり見せるタイツ、それに装飾過多な衣装。片手にはレイピアを掲げ、人々の視線を受けて気取った仕種で格好をつけると、細い剣の先端で大ぶりの羽根つき帽子のふちをちょいと突き上げる。

顔がのぞいた。大きな、とても大きな顔。茶色？ 違う、あれはオレンジ色――

目は扇形、鼻は三角。口はぎざぎざした笑み。その内側から、灯火のような光が漏れている。

シグリィは屋台のひとつを見やる。この町の名産、パンプキン人形。

伯爵だあと誰かが叫んだ。子どもの声だ。

まるでその声を合図にしたかのように、月を背にして空に浮かんだパンプキン伯爵は、大きな動作で彼の頭上を振り仰いだ。まるで何かを宣言するかのように、レイピアの先端を虚空に向かって突きつける。

銀の先端がきらめいた。

弾けた光が無数の輝きとなって空に散らばる。黒の背景によく映える数々の光は徐々に大きくなり、やがてそれぞれに変形していく。

ひとつ。みすぼらしい服を着た胴体に、狼の頭部がのっかった何か。

ひとつ。一見大柄な人間でありながら、よく見るとこめかみに釘が刺さり、顔にも肌にもつぎはぎの痕がある何か。

ひとつ。黒いマントに身を包む細身の紳士――だが、目が赤い。鷹揚に微笑む唇の端に、やはり牙が見える何か。

ひとつ。黒いローブに大振りのとんがり帽子。箒にまたがった老婆のような何か。

それは絵本に出てくる魔物たちだ。全体的に黒い色彩の彼らだったが、光から生まれたゆえかそれとも誰かの意図か――その輪郭は月色に発光していて、闇に溶け込むことはない。それどころか滑稽な彼らの姿は静かな夜空とはあまりにもそぐわず浮いている。

そう、滑稽だった。

何しろ彼らは等しく頭身が低いのだ。一番紳士然とした黒マント——吸血鬼——でさえ、四頭身もない。幼い子供の体格に近い。不自然に大きな頭はとても重そうで、通常の生き物ならばバランスを保つことさえ難しいだろう。だが彼らはそれが当たり前のように手足を震わせ、動きだした。

顔だけ狼の狼男がその大きな頭を振り見出し、ぐおおと唸る。音声はないが、仕種がそれを思わせる。

釘の刺さったフランケンシュタインが、のろのろと鈍重に歩き出す。

吸血鬼は一步退き、マントを気障に払い、構える。

魔女は箒に乗ってすいすい空を飛び渡り、手に持った玩具のような杖を振る。杖の先端からはやはり作り物にしか見えない光が飛び、ピンク色やオレンジ色といった派手な色に何度も瞬いた。

。

四体の人形のような魔物は、パンプキン伯爵を囲んでにらみすえた。

まるで、子どもに見せるための劇だ。

(……いや。劇そのものか)

絵本の中を、人形たちが再現している。この町の子どもなら誰もが知っている光景なのだろう。町の子どもたちはいつの間にか魅入られ、固唾をのんで空の劇を見守っている。

——これは夢？

夢じゃない。夢よりずっと鮮明な、幻だ。本当はこの手の届かない遠い遠い場所で繰り広げられている虚像。

けれど今、子供たちの目には、何よりもたしかにリアル。

そしてシグリィは気づいた。自分も——子どもなのだ。

期待に輝く無数の瞳。その中には大人のものも幾多に含められていた。疑心を抱く者さえ目を逸らすことができず、まさしく町中の視線を集めた先——

魔物に囲まれ、退路を塞がれた伯爵は。

動揺した様子もなく、優雅にレイピアを一閃。

それを皮切りに、一斉に魔物たちが伯爵に襲いかかった。

子どもたちが喚声をあげた。ひとつひとつの動作、すべてが見やすいスローモーション。躍りかかる魔物たちを、パンプキン伯爵が華麗にかわし、反撃の一打を次々と加えていく。魔物たちの連係プレーに時おり危なくなりながらも、ふとした瞬間に逆転する。

まさしくヒーローの活劇だ。

背後におわす月の冴え冴えとした輝きは、まるで戦いの行方を見守る女神の眼差し。

狼男やつぎはぎ男の動きは面白おかしく、吸血鬼はあくまで気障で、魔法使いの放つ魔法は見た目だけ派手。返す伯爵のふるう剣からはまぶしいほどの火花が散り、魔物たちを追いこんでいく。といっても彼らは月を背にした位置から外れることもない。

——おそらくあの月の方向に、この幻の元がある。

空に心を奪われる町の人々を横目に、シグリィは月の下部を見た。闇夜に沈む大地。遠いその場所に何かが見えるわけでもない。それでも、

それが誰の力によるものなのか。

シグリィは腹の底から愉快的気持ちが湧き上がってくるのを感じた。彼女らしい、夢と愛嬌のある幻想世界――

――彼女は魔女の衣装を着ていたのだったか。

今空で暴れている老婆と同じような衣装だ。マントに箒にとんがり帽子。

ハロウィンでいう魔女は、基本的に悪役のはずだった。だが“悪役”と決めたのは人間のほうであり――

時にはこんな茶目っけも出すのかもしれない。

見つめる先、伯爵に散々打ちのめされた魔物たちは、やがて伯爵の前にひれ伏した。

伯爵はレイピアをおさめ、大きくうなずく。そして、膝をつき、魔物たちに手を差し伸べた。

ワッと子どもたちが一層声をあげた。

伯爵の手を取り立ち上がった、よつたりの魔物。月を背にし、伯爵を中心にして、彼らは一列に並んだ。揃ってこちらを見る――町の方角を。

劇の幕引き。登場人物たちは観客に向かって、深く礼をした。

拍手と口笛が鳴り響く。

やがて魔物たちはこちらに背を向け、月へと還っていく。その背中が徐々に小さくなり、点となって消えるまで町の熱狂はおさまらなかつた。

娯楽多き東部で、ひとりの術者が生んだ酔狂の夜。

きつとこの先ずっとこの町で語り継がれるに違いない幻。町に刻まれた思い出のひとかけら。絵本をめくる子どものような心に思いをはせて、シグリィは我知らずこぼれる笑みを止めることができなかつた。

セレンの術は広範囲に渡った。数年ともに過ごしているカミルでさえ、中々見ることのできない規模だ。

丘の上、次々と幻を頭上に生み出す女。その体を常に魔力の波動が包んでいる。ゆらゆら立ち上るオーラのようなそれは、あまりにも魅惑的な色をしていた。

見惚れる一方で、カミルは剣の柄に手をかけていた。――それが、セレンからの頼みごとだった。

『これだけの規模の術使っちゃうと、“迷い子”寄せちゃうから。あなた、相手してくれる？』

だからこそ、町から離れたところへ来た。魔力で生み出した虚像はすべて、町からほど遠い距離に展開している。この距離なら、“迷い子”はこの丘には来ても町には行かない。

セレンは魔力の開放を続けている。一つの曲のように紡がれ続ける詠唱。まさしく歌うように。

昼間あれだけ遊び回って、今これだけの力を行使する。単純な体力ならカミルのほうが遥かに上のはずなのだが、こういうときのセレンには決して勝てない気がする。

やがて――

いったいどれくらいの時間だったのだろうか。

虚像たちは、月に吸いこまれるように消えた。

夜空が本当の姿を取り戻した。月は無数の星を従え、静かにそこに浮かんでいる。

「――ハァッ！」

セレンは大きく息を吐き、その場にひっくり返った。

顔にはどっと玉の汗が噴き出し、乱れた呼吸に咳き込む。二、三度体を跳ねさせた彼女が漏らすうめき声は、長時間の詠唱で枯れていた。

やがて咳が落ちついたころ、セレンはどさりと背中を地面に落として「疲れた！」と声を上げた。

言葉とは裏腹に、彼女は達成感に満ちた表情を浮かべていた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だけど、今“迷い子”きたらちょっとムリ」

「……無理しすぎではありませんか」

セレンの魔力キャパシティが尋常でないことは重々承知しているが、だからと言って強大な力の行使にリスクがないわけではない。生身の人間には違いがないのだから、体には相当な負担がかかるはずだ。

だが、彼女は片腕を上げ、虚空で人差し指をくるくる回した。

「だって全力でやらなきゃもったいないじゃない。一年に一度しかないお祭りなのよ？」

「それはそうでしょうが」

「あ、分かってないわね？ いーいカミル」

人差し指がぴんと立った。起き上がるならそれをこちらに突きつけたかったに違いない。

「一年に一回！　ねえ、私たちが健康でいられるのはだいたい五十歳まででしょう？　単純に計算してよ、私たちにはあと三十年もないじゃない。つまりこのお祭りを全部経験できても三十回足らず！　しかも毎年この町にいる可能性を考えるともっと少なくなるでしょ。そもそも私たち、明日には死んでも別にフシギじゃないでしょう？」

早口にまくしたてる。おまけに枯れていて、お世辞にも聞き取りやすい声ではない。

だが困ったことにカミルは、自分が彼女の言葉を一字一句聞き漏らさないことを知っていた。「――さらにさらに。例えばシグリュさまが『子ども』である時期、って考えるともう片手で数えられるわ。私たちが二十代のうち、って考えてもいい。もちろん三人とも大人になってからも楽しみかたもある。でもどうやったって、ひとつの年齢のときに一度しか経験できないわよね？」

「……………」

「私がこの世で一番惜しいものは時間よ、カミル」

そう言って、女は微笑んだ。

この上なく透明な微笑だった。

――この世で一番貴重なものを逃さないために。疲れたなんて言っていられない。

「むしろ体力とか健康とかって、そのためにあるよーなもんよ。私にとっては、ね」

悪戯っぽく言う、彼女の目は猫の目のように。

気まぐれなようできて、本当はひとつの芯を抱いた者の瞳。

カミルは苦笑を口の端に刻む。

「だから、そのためにお金は惜しまないわけですね」

――その金を稼ぐのにも貴重な時間を費やすのだから、言ってみれば金と時間は同等なのだが

。

カミルはそれを言わなかった。

セレンがそこまで“今の時間”にこだわる理由。それは彼女自身のためではないと気づいていたから。

視線を巡らす――町の方角へ。

多くの人々に紛れて、そこには彼らの主もいるはずだ。今頃どんな顔をしているだろうか。同年代の子どもたちと比べたら随分大人びているし、知識ならばカミルもセレンも勝てやしない。だが、圧倒的に経験の足りない主。

この一夜は、たしかに少年の糧となるのだろう。心に降り積もっていく思い出のひとつかけらとして。

セレンが息を吐いた。大分整った呼吸をたしかめながら、彼女は言った。

「この町ではハロウィンにはカボチャがつきものなのね。この町のカボチャは味がいいのよ。今頃きっと町中がおいしそうな匂いで満ちてるんだわ」

「そうでしょうね」

答えながら、カミルはとある一方を目に映していた。

遠くから段々と近づいてくる黒い影の一群。統率されているわけではない、ただ目的が同じだ

けの凶暴な群れ。

「……早くシグリィ様の元に帰らなくては。心配をかけてしまう」

「そうね」

任せたわー、とセレンは言って、目を閉じた。動けない以上、いっそそのほうが回復が早いと判断したのだろう。

——自分は彼女のように、夢のある思い出は生み出せない。

けれど、彼女のフォローぐらいならできる。今までだってそうだったのだ。これからも、きっとこれが続くのだ。

「あとでカボチャを買っていきましょうか」

「え、ほんと!？」

「勘違いしないでください。あなたにじゃなくシグリィ様にです」

えー、と不服そうな声を上げるセレンはまだ目を閉じたまま。きっと見えなかつただろう——自分が笑みを浮かべていたことには。

靴底からかすかな地鳴りを感じ取る。

満天の星空の下、握った刃は月光を弾いていつになく輝いていた。

祭りの翌朝は、熱気を名残惜しむかのような静けさで始まった。

「おはよう。……セレンはまだ寝ているのか」

「ええ。昨夜騒ぎすぎでしたから」

いつもより遅い起床の主を迎えて、カミルは穏やかに「お疲れではありませんか」と訊いた。

大丈夫だ、と少年は笑った。

「いい匂いがするな」

「台所を借りました。今朝はかぼちゃ料理です——一日遅れですが」

「お前が作ったのか。それはぜひ食べたいな」

セレンを起こそうかと少年は言った。

カミルは首を振った。

「寝かせておきましょう。魔女は力を使い切って眠っているんです」

「そうかもしれないな」

そう言って食堂へ向かう少年。たぶん彼は気づいていただろう——セレンの部屋からかすかに漂うカボチャの匂いに。

『お菓子をくれなきゃ悪戯するぞ!』

昨夜のセレンの声がよみがえる。カミルは少し笑った。菓子を差し出したところであの女は、悪戯ならぬあらゆる面倒や騒動を起こすに決まっているのだ。

だが、それでいい。

別に悪戯するのをやめさせたくてお菓子を渡すわけではない。昨夜子どもたちにお菓子を配っていた大人たちも、きっと。

「パンプキンパイもありますよ、シグリィ様」

目覚めたときにあの魔女はどんな顔をするのだろうか。それが心から楽しみだと、彼はそう思った。

<ハロウィンの夜／終わり>



【冬の贈り物】

――冬は、苦手だ。

吐く息が白く染まり、眼前をゆらゆらと立ち昇りながら空に溶けていく。

冬も深まった今宵、月も星も、寒さに身を縮めるかのような大人しい灯りで下界を照らしている。

「冷えるわねえ」

セレンは両手に温かい息を吹きかけながら、目の前でぱちぱちと燃える焚火の火を眺めていた。

目を焼く炎の色は、この季節どんなものよりも力強い。この広大な大地の片隅で燃える赤の色が、凍えそうな心を慰めてくれる。

(寒いのはあまり好きじゃないのよね)

彼女は胸中でつぶやき、そっと肩をすくめた。

何となく隠れるようなしぐさになったのは、焚火を挟んで向こう側に人がいるからだ。――自分より二つほど年上の青年。

セレンの心のぼやきが聞こえたわけではないだろうが。カミルという名の男は炎の向こうで顔を上げた。

「もう眠ったらどうですか、セレン。毛布なら後ろにありますよ」

「んー」

言われなくても知っている。セレンは自分もたれていた荷物を、自分の横に引っ張り出した。

彼らはすでに、一番寒さの厳しい北方を抜けていた。だが、この東部も冬は冷え込むのだ。毛布や防寒具の類を持って旅するのは色々と難儀するため、冬はそもそもそういった旅程を計画しない――最低でも野宿にはならないようにする――のが普通である。

セレンは一年ほど前まで、気ままな一人旅だった。

彼女は大荷物が大嫌いだ。だから間違ってもかさばる毛布だの防寒具だのを買い込むことはなかった。寒い時期は無理に遠出をせず人里に留まり、どうしても一日以上かかるような行程では一晩中火を絶やさず、眠らずに過ごす――まあ一人旅をしていれば、昼間に仮眠を取りながらの数晩の徹夜には慣れるものである。

だが今の彼女は、もう一人旅ではない。

焚火の向こうにいる男と、そしてもう一人。

(……そういえば、シグリィ様とカミルと知り合ってからもうそろそろ一年かしらね)

荷物を解きながらふと思い出し、彼女は空を見上げた。

ここ東部は、北部に負けず星が美しい。冬の澄み切った空気の中で見える光は、相変わらず控

えめなちらちらとした風情だったが。

——二人と知り合ったのも、冬の真ただ中だったのだ。

「シグリィ様の分も用意してもらえますか」

「分かってるー」

視線を荷物に下ろし、手早く寢床をしつらえる。

毛布は二人分あった。三人旅だが、常に一人は寝ずの番だからだ。今夜はカミルがそれを担うことになっている。明日次の町に着けなければ、明日の番は自分。それを思うと正直憂鬱だ。

はあ、とセレンはため息をつく。

(寒いのよねー)

いかに北国生まれで、どこからどう見ても北国人の容貌を持ち合わせているとはいえ、寒さに強いわけでは決してない。

むしろ寒さはどうしても苦手だった。生まれて二十年経った今でも。

もともと、彼女はそれを連れの二人に口にすることは一度もなかった。

——言えば二人は驚くだろう。セレンは北への愛着を隠したことがない。それなのに寒さが嫌いだと言えば、驚いたのち彼らは必ず心配する。

だから、言いたくなかった。

心配されたところで、どうにかなるものではない。だったら、最初から心配されないのがいい。

(シグリィ様は優しいから、なんかあれこれ手立てを考えてくれようとするわね。カミルは...
...『そんなことじゃこの先どうするんですか』とかくどくど言いだすわ、きっと)

そしてくどくど言いながら、やたらと自分を寒さからかばうようになるだろう。彼はそういう人だ。ほんの一年しか共に過ごしていないが、その確信がある。

シグリィとカミル、二人の反応を想像して、セレンはくすっと笑った。

漏れた息はやはり白く染まって、あっという間に消えた。

セレンは唇を引き結ぶ。そして毛布を敷く作業を終えてしまうと、仕切り直すように大きな声を出した。

「できたわよ！ シグリィ様はー？」

「まだお戻りになっていませんがー」

彼女の問いに反応して、カミルが辺りを見回した。

少年シグリィは、先ほど「ちょっと歩いてくる」と荷物を持ってどこかへ行ってしまった。

まだ十歳と幼い彼が、一人でこの夜の下をふらふらほっつき回るなど、本来とんでもない話だ。

カミルもセレンも止めようとしたのだが。まるでそれを避けるかのような素早さで少年は逃げて——そう表現したくなるような足取りで——行ってしまった。

(まさかこのまま帰ってこないつもりじゃ)

ふとそんな考えが頭をよぎる。

そしてすぐそれを打ち消した。心の中で苦笑する。

(だめね。まだそんな考えが抜けてない)

――少年と出会ってから、もうすぐ一年。

かつての彼はとても反抗的だった。世話をしようとするセレンたちを疎ましがっているのは明らかだったから、彼が姿を消すのではないかといつも心配していた。

後から聞いたところによると、意外にもシグリィは連れの二人を疎んじてはいても、離れようと考えたことはなかったらしい。ただしそれは彼の《親》が二人から離れないように“命令”していたからという、ただそれだけの理由だったのだが。

今ではそんな話もできるようになった。

その一方で、彼ら三人はまだまだお互いを知らないまま。

知らなくても旅はできる――知る必要があるのは“この先の自分ら”であり、過去などどうでもいいと、思うこともある。

けれどセレンは、話せるのなら過去の話をしたと思う。

自分が辿ってきた道。二人が辿ってきた道。話を聞けばそれで相手のことが分かるわけではないのだけれど、全く無意味だとも思わない。

(でもカミルは話しそうにないわよね。どこかできっかけがあればいいんだけど、ただ聞いただけじゃ絶対答えないわねあの人は。シグリィ様は……あー)

考えて、ほんの少し肩をすくめた。

(……シグリィ様は、話せなくても仕方がないか)

ほうとつく息。両腕で立てた膝を抱え、顎を埋めた。小さく縮こまるように。

指先で引っぱり深く被ったフードの隙間に、風が忍びこむ。

耳が痛みを訴えている。

この分では、今夜のうちに雪が降るかもしれない。豪雪地帯はとっくに抜けているとは言え、降りだしたらまず間違いなく積もる。明日の旅路は難儀するに違いない。それを思い、ますます憂鬱になった。

足音が聞こえたのはそのとき。

「シグリィ様」

カミルが背後に顔を向けた。

炎が、ようやく帰ってきた少年の姿を照らし出す。

「お帰りなさい～」

セレンは呑気な声音で彼を迎えた。「ご無事ですねえ。よかった……」

吐息のようにつぶやく。「ああ」と少年は少しばかり困ったような声を出した。

「心配……させた。すまなかった」

……なんだかぎこちない。

訝しく思って、セレンは少年を見つめた。

出会ったばかりの一年前ならともかく、ここ最近は会話もずっと打ち解けていたはずだ。一体どうしたことだろうか。

同じことを感じたのだろう、どうかしましたかとカミルが尋ねる。

「いや」

少年はますます不可解に、妙な仕種を見せた。躊躇っているような――あるいは、恥ずかしがっているような。

セレンはひそかにカミルを見る。カミルも一瞬こちらを見て、怪訝そうな表情を見せた。

「どこへ行ってらしたんですかー？ シグリィ様」

「ちょっと近くの……適当な場所に」

近くにと言う割りに、セレンやカミルからは完全に分からない場所まで行っていたようだが。

「何しに？」

セレンはさらに問う。「そんな荷物を持って、何してたんですか？」

少年の手にある荷袋。身軽さを優先するため積極的には荷物を持たない彼が、何も説明することなく持っているもの。それを指摘されて、まだ幼い少年はますます眉を曇らせる。

別に少年を困らせる気はなかったが、いつもと違う様子の彼を見るのが少し面白かった。

同時に、胸の奥にほんの少しの寂しさが生まれる。――とうとうこの少年も、自分たちに秘密ごとを作るようになったのか。

それは成長した証とも言える。それでも――むしろ、だからこそ――切ない。

自分の胸の内をごまかすように、セレンはにっこり笑って隣の地面を叩いて見せた。

「とにかくこっちへ来ませんか。寒いですよー。あったまりましょーよ」

ああ、と少年は素直に歩いてきた。セレンは布を出して敷き、彼が座るのを待った。

カミルが焚火に枝を放り込む。

ぱちりと爆ぜて、赤い色が揺れる。

――セレンの隣に腰を下ろした少年が、ふとセレンを見上げた。

「寒いかな？」

セレンは彼を見返して、ぱちぱちと目をしばたいた。

「そりゃ寒いですよーシグリィ様」

「お前寒い嫌いだろう？」

「――」

思わず絶句した。それを言った覚えはなかったのに。

その思いが表情で伝わってしまったのだろう、少年は苦笑した。

「見ていれば分かる。お前が寒いのを嫌がってることくらいは」

言いながら、傍らに置いていた袋に手を入れる。先ほどまで持ち歩いていた、あの袋だ。

やがて彼の手が掴み出したのは――

「……これで、少しは防寒できる、と思う」

セレンに差し出されたのは、手編みの肩掛けと手袋だった。

受け取ったセレンはまじまじとそれを見る。あたたかい臙脂色の布。肩掛けの網目はきれいに整っている――かと思えば、ある一端には乱れもある。多分そこが編み始めで、編み続けている内に慣れていったのだ。

肩掛けと同じ色の手袋はミトン型に作られていた。網目がふっくらしていて、とても柔らかい。

「これ、まさかシグリィ様が？」

編物から視線を上げ、今度は少年を凝視する。

少年はとても珍しく、眉尻を下げていた。

「……迷惑だったか？」

さらに彼は袋からもう一つの物を取り出した。そちらは大きめの手袋のようだ。セレンのものとは違い指が一本一本独立している。

「こっちはカミルに」

炎の向こうでカミルが固まっていた。彼にしても予想外の展開だったらしい。

この少年がモノ作りを得意としていることなら、よく知っている。普段は装身具の類にばかり手を出しているのだが、その気になれば裁縫もできるに違いないと思っていた。器用さは人一倍の彼にしてみれば、同じように手先と目を使う編物はさほど難しいことではなかったのかもしれない。

立ち上がってカミルに手袋を渡しに行った少年は、戻ってくると頬を引っ掻きながら腰を下ろした。

照れているように――見えた。

「思ったより時間がかかった。本当はもっと早くに完成させるつもりだったんだ。冷え込むのも早かった……東部の冬はこうやって始まるんだな」

「ずっと編み物してたんですか？」

思わず問うセレンに目を向けて、少年は不安そうに答える。

「北では、冬が始まるころには母親が新しい防寒具を夫と子供に作って渡す。元気で冬を越してほしいという祈りを込める……そうだ。だから」

ぱちり。

相槌を打つように、焚火が小さな音を立てる。

たっぷりとした呼吸の後、少年は言った。

「……いつもありがとう。この冬も、二人に元気でいてほしい」

——冬は、苦手だ。

寒さが肌を締め付ける。誰の体も——自分自身の体も、己を守るために勝手に壁を作る。

それに気づくたび、“孤独”という言葉を使い知るのだ。目の前に人がいてさえも。

けれど。

「シグリュ様……！」

セレンは少年に抱きついた。

「セレン？」

驚く彼を力いっぱい抱きしめる。少年が腕の中にいることを、確かめるために。

防寒具の奥の奥にあるぬくもりを見つけるために。

「ありがとう、シグリュ様」

頬をくっつけて、セレンは囁いた。

少年が疑問符を浮かべるのが分かる。構わない。理解はしてもらえなくても気にしない。

ただ、自分がこんなにもあったかいことさえ、伝わればいい。

空気が変わったかのように、焚火がいつそう激しく揺れた。ゆらゆらと動く赤い色は、まるで自分も混ざりたいとうずうずしているかのようで。

「……そのまま寝ますか。寝袋がそばにありますし」

炎の向こうにいる青年がそう言うのが聞こえて、セレンはようやく顔を上げた。

「じゃああなたもこっちいらっしゃいよー。三人のほうがあったかいわよ」

「……っ、私まで寝たら誰が見張りをするんです……！」

「んー、でも傍にいるくらいいいじゃない？」

「ですから……っ」

「何怒ってんのよカミル。あ、シグリュ様。あの人ガンコだから私たちがあっちに行きましょーか」

「……いや、何となくそれはしちゃいけない気が……するんだが」

「えー？ 何ですかー？」

セレンは嬉しかった。

一つ言葉を発するたびに、一つ言葉が返ってくるたびに、その場が温まっていくような気がするのだ。こんなことはきっと、冬にしか味わえない。

だから。

だから苦手な冬も、嫌いにはなれない——

月は徐々に位置を変えていく。

見上げた夜空に輝く星はいつそう輝きを増して、地上を見下ろしている。

明日になれば、冬はさらに深まる。しばらくは寒くなる一方だ。

でも、そんな旅路もいいだろう。

冬が愛しいのはその先に春があるからではなく、冬を越えていくその日々に意味があるからだ。それを教えてくれる人がいるから、この先の自分は絶対寒さに負けたりしないとセレンは強く胸に宣言する。そう――

彼らがいる限り、ずっと。

<冬の贈り物／終わり>

冬の贈り物

～pre story of the closed moon～

<http://p.booklog.jp/book/70698>

著者：瑞原チヒロ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/chihiromizuxx/profile>

イラスト：浅都裕久

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70698>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70698>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ